令和6年度3月/12月及び修了者 情報科学研究科学位記伝達式

令和7年3月25日（火）に令和6年度3月修了者（博士課程前期2年の課程126名、博士課程後期3年の課程 26名）の学位記伝達式が執り行われ、加藤寧研究科長より修了者一人ひとりに学位記が手渡されました。研究科長の祝辞に引き続き、ZHU YISHIさん（応用情報科学専攻 加藤・川本研究室 博士後期課程修了）より修了生代表の挨拶をいただきました。修了生の皆さんの今後のご活躍を研究科一同、お祈り申し上げます。

学 生 の 声

応用情報科学専攻　博士課程前期2年

大原　玄さん

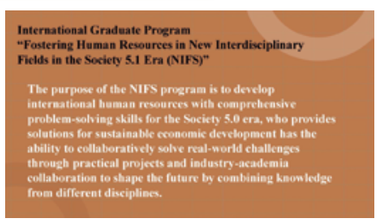
近年のリモート化の流れやメタバースの発展に伴い、遠隔地の他者と気軽にコミュニケーションがとれるようになりましたが、現実のように触れ合えず物足りなく感じてしまうことも多くあります。私の所属する昆陽研究室では、触覚の原理を解明し、他者と触覚を共有できるようにする研究を行っています。触覚を共有できるようにすることで、他者とのコミュニケーションのリアリティが向上するだけでなく、遠隔操作するオペレータがロボットと一体化したかのような操作を可能にするなど幅広い応用が期待できます。

私は研究室見学でスティック型デバイスを使って仮想のドラムを叩くVRドラムの体験をきっかけに興味をもち、触覚というあらゆる分野から求められている技術の研究に自分も取り組みたいと考えこの研究室を志望しました。現在私は、振動を利用してVR空間で自身の周りをキャラクターのようなオブジェクトが動いているような体感を表現する技術の研究を行っています。この技術は仮想空間の情報を表現する汎用的な触覚技術であり、従来の様々な視聴覚コンテンツに応用することができます。視聴覚との相互作用の検証や、様々な場所にオブジェクトを表現できるデバイスの開発など、リアリティの高い新しい体感を目標に様々な研究を進めています。

触覚の研究では、刺激を生成するアクチュエータに関する機械工学、VR技術で利用される視覚・聴覚の神経科学、またユーザーの体感を分析する認知心理学など幅広い分野が関係します。多くの分野の知見が必要なだけに大変なことも多いですが、発表会などで様々な分野の研究者の方とかかわることで常に新鮮な刺激を受けられ、自分の研究の可能性の広さを感じられるのでとても楽しく研究できています。触覚という分野は広く期待されており普及する過渡期にあるため、今後も研究に集中できる環境に感謝して、社会に貢献できるような研究に取り組んでいきたいと思います。

国際交流推進室

国際交流推進室では文部科学省国費外国人特別枠大学推薦における本研究科主催プログラムの運営、データ科学国際共同大学院の補助を中心にした業務を、多くの教職員の皆様のサポートのもと運営しております。特に文部科学省国費外国人特別枠大学推薦における本研究科主催プログラムでは、2023年10月受入分で受入れ終了したAIQDS（AI, Quantum Computing, Data Science）の後継として、2024年10月受入分から受入れが開始されたNIFS（Fostering Human Resources in New Interdisciplinary Fields in the Society 5.1 Era）が継続されております。この新規プログラムは文部科学省国費外国人特別枠大学推薦候補者選抜枠と私費留学選抜者枠の両方で選抜した上で受入れた留学生が、本研究科の修士課程、博士後期課程の所属専攻の共通基盤科目、大学院専門科目を受講し、所属研究室での指導教員の指導のもとで学位論文に集約されるべく修士・博士研修に取り組みながら、自身の学位論文研究内容を実世界の社会課題解決に繋げるためのデータサイエンススキルアップに関する科目にも合わせて取り組むことができるカリキュラム構成とさせていただいております。この文部科学省国費外国人特別枠大学推薦プログラムNIFSは2026年10月受け入れ分まで継続されますが、今後の展開が期待されます。



GSIS Tohoku University Graduate School of Information Sciences
東北大学 情報科学研究科 ニュースレター NEWS LETTER vol.26

【編集・発行】
東北大学 大学院情報科学研究科 広報室　E-mail：koho@is.tohoku.ac.jp
〒980－8579 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6番3号09
TEL：022-795-4529　FAX：022-795-5815　https://www.is.tohoku.ac.jp/

このパンフレットは「水なし印刷」により印刷しております。
環境にやさしい植物油インキ「VEGETABLE OIL INK」で印刷しております。

GSIS Tohoku University Graduate School of Information Sciences
東北大学
情報科学研究科ニュースレター
NEWS LETTER
vol.26

「質的」人間情報科学の展望

徳川 直人 教授

新しい集まりの場で自己紹介をすることになった。何をどこまで話すべきか。研究室なら自分の関心だろうが、動機となった経験まで出すかどうか。まして趣味の話は？

このような話題の選択はトランプのゲームに喩えることができる。手持ちの札を何からどこまで見せてゆくか。それによって皆に見える「自分」が異なり、相手側の出方も異なってくる。うっかり外せば「ヘンなやつ」認定だって覚悟しなくてはならないかもしれない。

私の研究の対象である「社会的相互行為」をこのように見れば、それはたちまち「情報過程」となる。話題だけではない。私の服装、私の言葉遣いなど、外見や立ち居振る舞いはすべてメッセージとなり得るのである。

「自分が自分について発信してしまう情報」には、しかし、話題や服装と異なり、見せ方を選べないものも多い。広義の身体、つまり年格好、体格、声、見た目の性別などがそれである。これらは必ずしも意図しない「自分」を周囲に告げ知らせて、意に沿わない相互行為を招き寄せてしまうかもしれない。たとえば見た目の男性には文化的男性性に沿った言動が期待されるというように。もっとも、現代と平安時代を比較すれば分かるように、その具体的内容は相対的なものだろう。かつて軍国主義時代には近視が国民の恥とされ、眼鏡がひ弱の象徴となった。こう見れば、繰り出すカードではなく「自分」自身が特定の意味を与えられた「記号」のようなものだとも言える。

いや、さらに展開すれば、自己自身が「自分」をいかに経験しているのかも、一種の情報現象ということになる。たとえば私は少数色覚者だが、私がなぜそれを知っていたのかといえば、かつて日本では学校での色覚検査が制度化されていて、私も何度も検査を受けたからだ。それを主導した当時の専門家たちは「色覚障害とその危険」を訴え、世間もそれに反応して検査結果によって進学、就業、資格などに制限を設けていた。私の経験も「だから私には～ができないにちがいない」というネガティブなものであった。

それが始まった歴史を探ってみると、世界的に共通して19世紀中盤以降、つまり人類が鉄道のような大量輸送システムを作り上げて色を交通信号に使い始めた時代と一致している。「私たちは本当に同じ色を見ているのか」とは非常な難問であるにちがいないが、専門家ばかりではなく一般人も直裁にそう問い質して「正常／異常」の境界線を引いてしまったのである。

ちなみに、20世紀の末以降、支障の大多数は環境要因の改善（カラーユニバーサルデザイン）によって解決できると考えられるようになった。想像されていた「危険」もほとんど実証されていなかったことさえ判明してきている。現在では「色覚異常」ではなく「色覚多様性」という表現も広まり、当事者への説明や前向きの相談が重要だとされている。

このように「どんな情報がいかに普及・分布しているか」によって、人間を分類するカテゴリーが異なり、技術の社会実装のあり方が異なり、人々の経験の「意味」も異なる。このような現象の「性質」について研究しようとするのが「質的探究」である。私の専門とする社会学では、量的分析法と並ぶ形で、「質的分析法」が種々考案され、新たに展開してきている。

私がいま取り組んでいるのは、農業・農村についてどんなイメージが広がっているか、それが食農コミュニケーションにどんな影響を与えているかという課題だ。同様に、「市民」という言葉がどのくらい市民権を得ているかによって市民活動の質に（むろん量にも）大きくちがいが生じるだろう。

「情報の社会的分布」は「概念、知識、物語、支配的な言説や図像の布置連関」等とも言い換えられる。その分析には情報科学の発想や方法を応用できるだろう。人文系と情報科学が結びつくことによって大きな展望が開ける可能性があると、私は考えている。

研究科ニュース

●主催・共催・後援行事

2025.3.16　「情報学 for all by all」
2025.2.17-18　第3回 量子アニーリング研究会
2025.2.6　第24回（令和6年度）情報科学研究科「学術懇話会」の開催について
2025.1.31-5月末　量子コンピューティング公開伴走型生配信授業 Quantum Annealing for You, The 3rd Challenge! (QA4U3)
2025.1.27　第22回統計科学セミナー（2025年1月27日開催）「サッカーのデータサイエンス～選手の運動からスペースを定量化する～」
2025.1.14　第21回統計科学セミナー（2025年1月14日開催）「科学研究における「再現性の危機」を考える価」
2024.11.20
2024.12.4
2024.12.18　NLPコロキウム
2024.12.17　計測自動制御学会 東北支部60周年記念研究集会
2024.12.16　第20回統計科学セミナー（2024年12月16日開催）「寄付の「動機」に迫る ー質的アプローチによる社会学的研究の可能性」
2024.12.5-12.6　第17回 インターネットと運用技術シンポジウム（IOTS 2024）
2024.11.25　第18回統計科学セミナー（2024年11月25日開催）「生物多様性の計量評価」
2024.11.11　第17回統計科学セミナー（2024年11月11日開催）「世論調査・住民意識調査が抱える課題」
2024.10.28　第16回統計科学セミナー（2024年10月28日開催）「日本沿岸のプランクトン動態解明に向けたゲノム解析基盤の整備」
2024.10.26-27　JPHACKS 開催報告について
2024.10.21　第15回統計科学セミナー（2024年10月21日開催）「Reluctant interaction modelingによる時空間可変パラメータモデルの高速化」
2024.10.11　第14回統計科学セミナー（2024年10月11日開催）「Joint AFT random-effect modeling approach for clustered competing-risks data によるオンライン開催」
2024.10.7　第13回統計科学セミナー（2024年10月7日開催）「BERTopic モデルを利用した震災復興研究：宮城県議会議員は何を発言してきたのか」
2024.9.27　第23回同窓会総会ならびに公開講演会・情報科学研究科DEIに関する教育FD開催案内
2024.9.17-9.20　基礎論サマースクール2024プログラム
2024.9.9-20　ヘキサゴン×GP-DS データサイエンスサマースクール2024について
2024.8.30　第12回統計科学セミナー（2024年8月30日開催）「人流データと、都市における個人間接触の分析」

●教員の受賞

2025.3.12　Honorable Mention Best Research Demo Award　北村 喜文教授
2025.3.6　EMM研究会優秀ポスター賞　栗林 稔教授、赤井 怜音、舩曳 信生（岡山大学 教授）
2025.3.6　EMM研究会学生研究賞　栗林 稔教授、角森 健太（岡山大学大学院自然科学研究科電子情報システム工学専攻: 修士2年）、舩曳 信生（岡山大学 教授）
2025.2.25　ACM SIGCHI Lifetime Service Award　北村 喜文教授
2025.1.21　第21回情報セキュリティ文化賞　曽根 秀昭特任教授（研究）（データシナジー創生機構）
※情報科学研究科実践的情報教育推進室の活動に多大な貢献をされたため掲載
2025.1.10　応用情報科学専攻・後藤 英昭准教授らの取組が「第7回日本オープンイノベーション大賞」の受賞にノミネート　後藤 英昭准教授
2024.12.27　Japan ACM SIGCHI Chapter Award, Lifetime Community Contribution Award（功績賞）　北村 喜文教授
2024.12.5　IEEE Transactions on Emerging Topics in Computing 2023 Best Paper Runner-up Award　加藤 寧教授、川本 雄一教授
2024.11.29　Outstanding paper awardを受賞　小野 内花倫さん（修士2年）、佐藤 雅之准教授、小林 広明 教授、岩崎 裕江特任教授（タフ・サイバーフィジカルAIセンター）、小松 一彦特任教授（サイバーサイエンスセンター）
2024.11.19　Highly Cited Researchers 2024（Computer Science分野）　加藤 寧教授
2024.10.29　GCCE2024 Presentation Award　岡田 佳都准教授
2024.9.7　ディープテックグランプリ2024にてBIPROGY賞、京セラ賞　昆陽 雅司准教授
2024.9.5　日本NPO学会第26回研究大会優秀発表賞　岡田 彩教授
2024.9.5　第5回優秀研究・技術賞　昆陽 雅司准教授、森田 夏実（田所研修了生）、一條 暁生（田所研修了生）、佐瀬 一弥（東北学院大）、永野 光（京都工繊大）、田所 諭教授（東北大）

●学生の受賞

2025.3.25　研究科長賞、総長賞　（研究科長賞）三澤 竜太郎、鴨田 豪、田中 滉大、大山 貴博（総長賞）ZHU YISHI、田中 涼太
2025.3.18　2024年度 学術奨励賞 研究奨励賞を受賞　柏分 峻汰郎（博士前期課程1年）
2025.3.18　日本音響学会学生優秀発表賞を受賞　李 戦（博士後期課程2年）
2025.2.18　大学院研究奨励賞を受賞　落合 聡（博士前期課程2年）
2025.2.17　SI2024にて優秀講演賞を受賞　大園 卓幹（博士前期課程2年）
2025.2.17　SI2024にて優秀講演賞を受賞　中島 海（博士前期課程2年）
2025.2.17　SI2024にて優秀講演賞を受賞　鈴木 裕太（博士前期課程1年）
2025.2.17　SI2024にて優秀講演賞を受賞　浜田 悠汰（博士前期課程1年）
2025.2.17　SI2024優秀講演賞を受賞　柏分 峻汰郎（博士前期課程1年）
2025.1.12　2024年度 スポーツデータサイエンスコンペティション（野球部門）
鈴木 碧月、阿部 正柊、山下 耀太郎、王子 越（荒木研究室 博士前期課程1年）
2024.12.24　第31回博士後期課程学生発表会 ベストプレゼンテーション賞
小川 都平（北村・藤田研究室 博士後期課程2年）、Hou Dengzhe（坂本研究室 博士後期課程2年）、横田 将輝（田所・昆陽研究室 博士後期課程2年）、佐藤 絵理（徳川・岡田研究室 博士後期課程2年）
2024.12.19　公益財団法人計測自動制御学会システムインテグレーション部門にて部門若手奨励賞
柏分 峻汰郎（博士課程前期1年）
2024.12.19　SI2024にて第二十回競基弘賞2024年レスキュー工学奨励賞　鈴木 翔大（博士前期課程1年）
2024.12.19　SI2024にて第二十回競基弘賞2024年レスキュー工学奨励賞　福澤 快（博士前期課程1年）
2024.10.24　日本ガスタービン学会学生優秀講演賞　萩田 泰晴（博士後期課程2年）
2024.9.18　第11回ロボット大賞 優秀賞（社会インフラ・災害対応・消防分野）
大野 和則（教授）、小島 匠太郎（特任助教）、藤田 淳（博士後期課程 3年）
2024.9.6　第19回YANSシンポジウム　ハッカソン賞（大喜利ハッカソン 審査員特別賞）
李 宰成（情報科学研究科・博士前期課程1年）
2024.9.6　第19回YANSシンポジウム ハッカソン賞　岩川 光一（情報科学研究科・博士前期課程1年）
2024.9.6　第19回YANSシンポジウム ハッカソン賞　朱 灝丞（情報科学研究科・博士前期課程1年）
2024.9.6　第19回YANSシンポジウム サイバーエージェント賞
古橋 萌々香（情報科学研究科・博士前期課程2年）
2024.9.6　第19回YANSシンポジウム SB Intuitions株式会社賞
古橋 萌々香（情報科学研究科・博士前期課程2年）
2024.9.4　第19回YANSシンポジウム ハッカソン賞 川柳ハッカソン 優秀賞
塩野 大輝（情報科学研究科・博士後期課程1年）
2024.8.21　22th International Conference for Media in Education（ICoME 2024）にて、Young Scholar Award　張 雨飄
2024.7.24　第31回博士後期課程学生発表会 ベストプレゼンテーション賞　（田中 涼太（鈴木研究室 博士後期課程2年）、齊藤 祐輔（徳川・岡田研究室 博士後期課程2年）、Ikpe ThankGod Ifreke Sylvanus（藤原研究室 博士後期課程3年））

第23回同窓会総会ならびに公開講演会・DEIに関する教育FD

9月27日（金）に令和6年度同窓会総会、同窓会主催による公開講演会、ならびに教育ファカルティディベロップメント（FD）が行われました。

同窓会総会では、会長挨拶、活動報告、事業計画の承認の他に、一層の盛り上がりのため東京でもイベントを催すことの提案などがありました。

今回の公開講演会では3名の講演者をお迎えしました。DATUM STUDIO株式会社の梶谷美帆氏（2012年博士前期課程修了）からは、『楽しいことを続けていたらヒーローになっていたエンジニアの話』として、データエンジニアとしての多様なご経験についてご講演いただきました。もっと強力なエンジニアになりたいと技術を磨き、Snowflake Data Superheroes の一人に認定されるまでになり、コミュニティで重要な役割を担われてご活躍です。自分の楽しいと思うことを追求することの大切さをお伝えいただきました。特定非営利活動法人 仙台夜まわりグループ理事長の新田貴之氏（2008年博士後期課程修了生）からは『より調査へ、より実践へ、そしてより理論へ』と題し、ホームレス支援の実践経験を共有いただくとともに、時代ごとに変わる問題の背景などについてご教示いただきました。社会調査と実践、省察を博士研究論文につなげていく計画とのことでした。国土交通省総合政策局公共事業企画調整課企画官の祢津知広氏（2005年博士前期課程修了生）からは、『国土交通省を満喫する！！～「学」と「官」の二刀流に挑戦～』のタイトルで、行政府におけるこれまでの活動と今後の抱負についてご講演いただきました。修士研究論文や趣味のマラソンが思わぬ形で政策立案に関係していったこと、これから社会人博士課程学生の立場で学と官と結びつけ、人中心の道路づくりを実現していくことなど、お話しいただきました。

教育FDでは、東京大学理事・副学長の林香里教授より『東京大学のダイバーシティ&インクルージョン推進 ～男性中心の大学からの脱却を目指して～』と題して、東京大学での取り組みについてご講演いただきました。マジョリティ側の意識改革、女性研究者のキャリアアップ、女性教員の増加、を柱とする目標・計画のもとでの施策をご紹介いただきました。DEIをマイノリティの問題ではなく全員が自分の問題として捉えること、無意識の偏見を意識化すること、他者に共感する想像力を働かせること、そして行動することの重要性をご指摘いただきました。また、様々な背景を持つ参加者からの質問に対して、たいへん温かみの感じられるご助言とご意見をくださったのが印象的でした。その他、参加者からは東京大学でのDEI施策の実現が東北大学を含む日本の諸大学に影響することに期待する声があがりました。門戸開放を掲げる当学においてDEIを推進させることの大切さを改めて認識する教育FDでした。

公開講演会の写真

第24回学術懇話会

第24回学術懇話会が令和7年2月6日（木）に開催されました。
今回は、3月末をもって本研究科を退職される田所諭教授、堀尾喜彦教授、木内喜孝教授にご講演いただきました

瓦礫の中から世界へ

応用情報科学専攻 人間-ロボット情報学分野 **田所 諭 教授**

田所諭先生は、阪神・淡路大震災を契機に、レスキューロボットという新たな分野に挑戦され、被災地での機動性や情報収集能力を備えたロボットの研究開発に尽力されました。特に、東日本大震災における福島第一原発事故では、ロボットが実際に活用され、大きな貢献を果たしました。また、ロボット競技会を通じた人材育成にも力を注がれ、研究者や若い世代がレスキューロボットに挑戦し続けられる環境の整備にも尽力されました。ご講演では、レスキューロボット分野の立ち上げの経緯や研究活動に加え、国際学術団体の会長を務められた際の経験についても語られました。そして、新たな挑戦においては、人々の意識を変えることの重要性を強調されました。オンラインを含め多くの聴講者が参加し、先生のメッセージは多くの人々の心に深く響いたことと思います。（応用情報科学専攻 昆陽 雅司教授）

ブレインモルフィック計算パラダイムとブレインモルフィック計算ハードウェア

応用情報科学専攻 ブレインファンクション集積学分野 **堀尾 喜彦 教授**

堀尾喜彦先生は、非線形アナログVLSIによる脳の「アーキテクチャ」を規範とした新たなハードウェアの実現に向けたご研究をこれまで進めてこられました。堀尾先生がご提案されたブレインモルフィック計算ハードウェアの枠組みは、人間の神経回路網の知見を活用したニューロモルフィックハードウェアの概念を新たに拡張・発展させたもので、脳型計算の新しいパラダイムとして世界的に注目されております。ご講演では、このブレインモルフィック計算の概念をわかりやすくご説明いただき、さらにそのハードウェア実現に向けたこれまでの取り組みについてご紹介いただきました。オンラインでも多数の方が聴講され、多くの人に慕われる堀尾先生のお人柄が感じられるご講演でした。
（システム情報科学専攻 坂本 修一教授）

炎症性腸疾患とともに

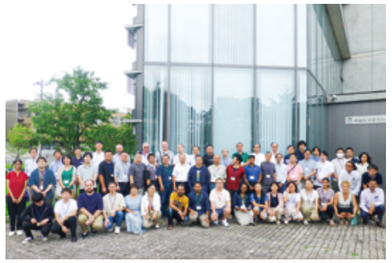
応用情報科学専攻 健康情報学講座 健康情報学分野 **木内 喜孝 教授**

木内喜孝先生は、厚生労働省指定難病である炎症性腸疾患の分野で多大な功績を挙げられました。ご講演では、研修医時に担当した小学生の症例を契機に、恩師である樋渡信夫先生と出会い、臨床家としての研究を目指すことになったエピソードから始まり、治療薬として成分栄養剤の使用が国際的な治療ガイドラインとして提唱されるために行われたランダム化比較試験が紹介されました。しかしながら、長期予後ではこの治療が他と比べて大差がないという結果から、病因解明に基づく治療法の開発を再認識し、ゲノムワイド関連解析による研究に展開していったとのことでした。「社会貢献することが人にとって最も幸せである」という信念から続けてきたという言葉が非常に印象に残ったご講演でした。（応用情報科学専攻 伊藤 千裕 教授）

専攻トピックス

情報基礎科学専攻 Department of Computer and Mathematical Sciences

第30回を迎える"有限および無限次元複素解析国際会議"（ICFIDCAA 2024）が本専攻の須川敏幸教授を開催責任者として、2024年8月19日～23日に本研究科において開催されました。数学における大規模な国際研究集会は欧米が主な開催地となることが多く、アジア圏の研究者がお互いの研究を知る機会が少ないのが現状です。そのような背景のもと、本集会は1993年から九州大学で始められ、（コロナ感染拡大により中止となった一時期を除いて）毎年、アジア諸国を開催地として行われてきました。実は第19回目の集会が2011年8月に本研究科で開催予定だったのですが、東日本大震災により開催地変更となったため、今回ようやく仙台での開催が実現しました。中国、韓国、マレーシア、インド、アメリカ、カナダ、イスラエル、ポーランド、セルビア、ロシア（オンライン）など海外から約40名、国内（学外）から約40名の研究者が参加し、複素解析学やその周辺分野の最新の研究やその応用について多くの講演が行われました。また、講演の合間や懇親会などにおいて、旧交を温めたり、新たな出会いが生まれるなど研究者間の絆が深まるとともに、活発な議論や情報交換が行われました。集会記録として研究科のジャーナルの特集号を出版すべく現在準備が進められています。来年はマレーシアで初めて開催されることになっており、今後のさらなる展開が期待されます。


▲ICFIDCAA 2024参加者の集合写真

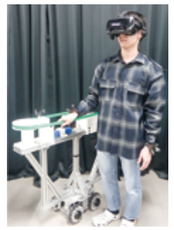
システム情報科学専攻 Department of System Information Sciences

2024年4月より、システム情報科学専攻に藤田和之准教授が着任しました。藤田准教授は、人の作業空間に情報技術を統合し、適応的に人の活動を支援する「Human-Workspace Interaction」という枠組みの研究を進めています。その中でも主要な取り組みとして、広大なバーチャルリアリティ（VR）空間の歩行や移動を伴う体験を高い臨場感で実現するためのリダイレクション技術や触覚提示技術が挙げられます。

リダイレクションとは、限られた物理空間内でVR空間での移動を完結させるために、ユーザの移動距離や進行方向に関する知覚を操作する（だます）方法論のことをいいます。藤田准教授は、知跳躍動作や開扉動作中に適用可能なリダイレクション手法を新たに提案し、それらの手法が従来手法に比べ、ユーザに気づかれることなくより大きくユーザの移動量を操作できることを明らかにしました。

さらに、藤田准教授は、歩行を伴うVR体験においてユーザが触れたモノに対する適切な触覚フィードバックを返すため、移動ロボットを用いた触覚提示技術にも取り組んできました。前述の開扉時のリダイレクションの際にドアノブを握った感覚を提示するシステムや、手すりや壁などの環境に固定されているモノに連続的に触れたときの触覚を、単一のロボットのみにより実現するシステムなどを実現しました。これらの技術は、エンタテインメントだけでなく、VR職業トレーニング、建築・都市計画など様々な分野へ応用できると期待されます。

▲開扉時リダイレクション手法


▲手すりの連続的な触覚提示システム

人間社会情報科学専攻 Department of Human-Social Information Sciences

コミュニケーション社会学分野（旧・社会構造変動論分野、2025年4月に名称変更）は、社会学の観点から、市民社会領域における社会現象に迫る研究室です。日常世界の構成と人々の行動原理、知識の社会的分布や言説世界、相互行為の形式と内容などの分析を通して、行動の変容や認識の拡大を研究しています。参与観察やインタビューなどの質的研究法を用い、対象の論理や意味に理論とフィールドワークの両面から迫る点が特徴です。

教授2名、特任助教3名、院生8名、それぞれが具体的な研究対象を持ち、互いに学び合う姿勢を大切にしています。「コミュニケーション」がメンバーの研究を結びつけるキーワードです。徳川教授が取り組んでいるのは「食農コミュニケーション」における「支配的表象の作用」や「語りづらさの経験」の質的記述です。岡田教授は、寄付をした人が自らの行為の動機をどのように説明するのか、言葉に注目した研究を進めています。周特任助教は、日中農村社会の社会関係と営農志向、また被災地における持続可能な市民活動のフィールド調査に取り組んでいます。張特任助教は、シンボリック相互行為論を基盤としたジェンダー論の展開と、女性の経験に関する語りの研究を進めています。

研究室最大の魅力は、メンバーの多様性です。ジェンダーはもとより、文化的背景、エスニシティ、ライフステージ（子育て中、社会人など）において、差異の豊かな研究室となっています。

▲ゼミの後、各自が今読んでいる本と一緒に

応用情報科学専攻 Department of Applied Information Sciences

2023年4月、応用情報科学専攻情報通信ソフトウェア学講座に中村隆喜教授が着任しました。中村教授の専門分野はストレージシステムに代表されるデータ基盤です。データ基盤は、データを保管・蓄積・利活用する機能を持ち、高度情報化社会において重要な役割を果たしています。

中村教授の研究グループでは、このデータ基盤に関して現在主に3つの研究を推進しています。1つ目は、大規模災害や障害に強いデータ基盤の研究です。東日本大震災の教訓を踏まえて考案した「リスク考慮型データ基盤」は、通信が途絶する状況下でも、近隣の安全な場所に冗長データを保存することで被災地域内のデータサービスを維持します。2つ目は、データ駆動型研究を高度化するデータ基盤の研究です。機械学習などの大規模データ分析処理では、インメモリ処理だけでなくデータの入出力処理が全体の処理効率に大きく影響しうるため、データ基盤で処理効率を向上する方法を研究しています。3つ目は、生成AI等によりストレージやデータ管理の使いやすさを向上する研究です。様々な情報システムとの連携と、使い勝手の良さの両立を狙っています。また、中村教授はサイバーサイエンスセンター研究開発部データプラットフォーム研究部にも所属しており、本講座は同センターの協力講座です。同センターは学内外の研究者向けの情報基盤の企画・整備・運用の役割を担っており、中村教授は研究データ基盤に関してこれらを統括しています。

▲リスク考慮型データ基盤の試作システムと中村教授